

出エジプト記16章 「日々の糧を備える主」

1A 主の約束 1-12

1B 民の不平 1-3

2B 不平を聞かれる主 4-8

3B 主の前に出る民 9-12

2A 試される民 13-30

1B 日毎の糧 13-21

1C 決まった量 13-16

2C 民の欲望 17-21

2B 主の安息 22-30

1C 加えられる必要 22-26

2C 命令を拒む者たち 27-30

3A 荒野における主の真実 31-36

本文

出エジプト記 16 章を開いてください、私たちは、「世におけるキリスト者の生活」というのを主題として、出エジプト記の学びを進めています。

前回から、荒野の旅の始まりを見えています。紅海が分かれた所から、主が民と契約を結び、律法を与えられるシナイの山までの荒野の旅の行程です。彼らが初めに出くわしたのは、「水」の問題です。三日間、荒野を歩いていて水が不足したところ、見つかった水は苦かったのです。それで苦いという意味のマラという名が付けられます。民がモーセに対して不平を言ったので、モーセが叫ぶと、主が木の枝をモーセに示されて、それを水の中に投げ込むように命じられました。すると水は甘くなった、とあります。おいしくなったのです。このことを通して、主は、ご自分に信頼して、ご自分の命令に聞き従うことを学ばせたのです。モーセが木の枝を水の中に投げ込む時、これが一体、何の役に立つのか？と思ったに違いありません。けれども、主が言われることなのだからと信じて、それでそのことを行なうのです。

16 章は、主の言われたことを、この方を信じて聞き従っていくことを学ぶ、もう一つの教訓が書き記されています。それは、マナの奇跡です。しかも、それが日々の糧に関わるものであり、日々の糧において天からの備えがあることを、神の戒めに聞き従いながら生きることを学ばせるものです。これはまさに、イエス様が祈りなさいと命じられた「主の祈り」の中身になります。「マタ 6:10-11 みこころが天で行われるように、地でも行われますように。私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。」私たちの信仰は、抽象的なものではありません。天で御心が行われていることを、地に

おいてもそれが行われるように、切に願うのです。具体的な生活の各場面で、主が現におられることを知ることができるように、祈るのです。その中でも、最も具体的なことは、私たちの日々の糧であります。その日々の必要において、主ご自身に、そしてその言葉によって生かされていることを知ることにより、この方が日々、自分の主になっていることを知ります。

1A 主の約束 1-12

1B 民の不平 1-3

1 イスラエルの全会衆はエリムから旅立ち、エジプトの地を出て、第二の月の十五日に、エリムとシナイとの間にあるシンの荒野に入った。

エリムは 12 の泉と 70 本のなつめ椰子の木のあるオアシスでしたが、そこから旅立ちました。第二の月の 15 日とのことですが、出エジプトが第一の月の 15 日の夜でしたから、ちょうど一か月後のことです。そして、「シンの荒野」ですが、エリムからさらに南東に、紅海沿いに下ったところであり、シナイの荒野に行く途中に広がっている荒野です。

2 そのとき、イスラエルの全会衆は、この荒野でモーセとアロンに向かって不平を言った。3 イスラエルの子らは彼らに言った。「エジプトの地で、肉鍋のそばに座り、パンを満ち足りるまで食べていたときに、われわれは【主】の手にかかって死んでいたらよかったのだ。事実、あなたがたは、われわれをこの荒野に導き出し、この集団全体を飢え死にさせようとしている。」

モーセとアロンに対する不平を言いました。民を荒野の旅に導いていることに対して、不平を言っています。後で、「その不平は、私たちに対してではなく、主に対してなのだ」とモーセとアロンは言いますが、しばしば人々は、誰かが自分に対してこんなことを行なったと言うのですが、実は、それは主ご自身との関係が、その人本人がうまく行っていない時に、その縦の関係がうまく行っていないことが、横の関係の中で現れます。

食べ物がないという必要が非常に強くなっていました。私たちの生活には、その時々には与えられなければいけない必要があり、それが満たされないと、それを満たしたいという欲求が力を持っています。そこで彼らは、古い生活であるエジプトにおいて、自分たちが食事を十分に取っていることができているのに、と言っています。果たして、奴隷の身分でそれだけの食べ物が十分に与えられていたのか？と思いますが、確かにある程度、食べるものはあったのでしょう。しかし、どれだけ過酷な労役であったのかを彼らはすっかり忘れてしています。私たちは、信仰の歩みの中で、一時的な必要が満たされないように感じる時に、罪によって支配されていた時のこと良かったといってしまうがちです。「ロマ 6:20-21 あなたがたは、罪の奴隷であったとき、義については自由にふるまっていました。ではそのころ、あなたがたはどんな実を得ましたか。今では恥ずかしく思っているものです。それらの行き着くところは死です。」

そしてモーセとアロンが、「この集団全体を飢え死にさせようとしている。」などと言っています。彼らの動機に疑いをかけているのです。これは、エバが蛇によって惑わされた時以来の問題ですが、神が意地悪をして、人がご自分のようになってはいけないうして、善悪の知識の木から実を取って食べさせないとしたのだと、中傷しました。けれども、主は良いお方です。この神の善意を信頼しないとはいけません。

2B 不平を聞かれる主 4-8

4【主】はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたがたのために天からパンを降らせる。民は外に出て行って、毎日、その日の分を集めなければならない。これは、彼らがわたしのおしえに従って歩むかどうかを試みるためである。5 六日目に彼らが持ち帰って調えるものは、日ごとに集める分の二倍である。」

天からのパンです。これは霜が降りる時に与えられるものなのですが、ここではそのような物理的な天のみならず、主が住んでおられる天という意味も含んでいることでしょう。主ご自身が、天における富を、地上において必要を満たすという形で施して下さるということです。パウロが、ピリピにある教会の人々から、支援金を受け取った時に、このように話しましたね。「4:19 また、私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たして下さいます。」

そして、「毎日、その日の分を集めなければならない」とのことです。それは、主のおしえに従って歩むかどうかを試みるためだ、と言われてはいますが、これはちょうど、冷蔵庫にその日の分の糧しかないような状況です。何年か分を倉庫に入れて、楽しもうと言った、金持ちの譬えのことを思い出して下さい。そこにはないものは、信仰です。目の前にある大量の食糧を見て、それで自分の必要が満たされると思いこんでいるのです。しかし、その日の分しかなければ、彼らは主の約束に日毎に信頼していかなければなりません。いや、それこそが主が望まれていることです。大事なのは必要が満たされることではなく、日々、主が満たされることを知って、それで主との交わりを深めることであります。

そして、もう一つ大事な教えがあります。安息日です。「六日目に彼らが持ち帰って調えるものは、日ごとに集める分の二倍である」と主が言われますが、それは七日目に集めないようにするためでした。主が六日かけて天と地を造られ七日目を休まれたように、イスラエル人も七日目は休み、主を覚えるようにします。ここでは、神の民が礼拝のために、犠牲にする労働の対価は主が必ず必要を満たされる、ということでもあります。

6 それでモーセとアロンは、すべてのイスラエルの子らに言った。「あなたがたは、夕方には、エジプトの地からあなたがたを導き出したのが【主】であったことを知り、7 朝には【主】の栄光を見る。

【主】に対するあなたがたの不平を主が聞かれたからだ。私たちが何だというので、私たちに不平を言うのか。」8 モーセはまた言った。「【主】は夕方にはあなたがたに食べる肉を与え、朝には満ち足りるほどパンを与えてくださる。それはあなたがたが主に対してこぼした不平を、【主】が聞かれたからだ。いったい私たちが何だというのか。あなたがたの不平は、この私たちに対してではなく、【主】に対してなのだ。」

モーセとアロンは、どのような食物が与えられるのかを具体的に言わずに、夕方には肉が与えられ、朝にはパンが与えられることを伝えました。夕方に与えられる肉によって、エジプトから彼らを導きだしたのが主であることを知ると言っています。私たちが主から必要を満たされ、よくされることによって、絶えず、「私を罪と死の縄目から、ご自分の血潮よって解放してくださったのは、イエス様なのだ。」と思い起こすことができます。それから朝に、主に栄光を見ると言っていますが、救い出された者たちは、主の栄光を見ることとなります。救われた者が礼拝をし、主の栄光を見ます。

それから、ここでモーセとアロンが強調しました、「いったい私たちが何だというのか。あなたがたの不平は、この私たちに対してではなく、【主】に対してなのだ。」とのことです。モーセとアロンは、あくまでも主に用いられている器です。器に文句を言って、何をやっているのか？あなたがたがそういうところに置かれているのは、主がそうされているのであって、その不平は私たちに対するものではなく、主に対するものなのだ、ということです。私たちが、いろいろな環境について、感謝がなくなり、強い不満を抱いているのならば、それは本質的に、そのような環境や状況をお許しになっている、主に対して不満を抱いているのだということです。

3B 主の前に出る民 9-12

9 モーセはアロンに言った。「イスラエルの全会衆に言いなさい。『【主】の前に近づきなさい。主があなたがたの不平を聞かれたから』と。」10 アロンがイスラエルの全会衆に告げたとき、彼らが荒野の方を振り向くと、見よ、【主】の栄光が雲の中に現れた。11 【主】はモーセに告げられた。12 「わたしはイスラエルの子らの不平を聞いた。彼らに告げよ。『あなたがたは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンで満ち足りる。こうしてあなたがたは、わたしがあなたがたの神、【主】であることを知る。』」

「【主】の前に近づきなさい」と、アロンを通してイスラエルの会衆が命じられています。主ご自身の臨在のところに来なさいと命じられているのです。そこに、物理的に主が雲の中に現われるようにされました。これはまさに、礼拝のところに来なさいということです。自分が日々の必要のことで不満をためている時に、主の前に来なさいと命じられているのです。それは恥ずかしいことでもあり、同時に、必要を備えてくださる方は主ご自身であることを知る時です。

2A 試される民 13-30

1B 日毎の糧 13-21

1C 決まった量 13-16

13 すると、その夕方、うずらが飛んで来て宿営をおおった。また、朝になると、宿営の周り一面に露が降りた。14 その一面の露が消えると、見よ、荒野の面には薄く細かいもの、地に降りた霜のような細かいものがあった。

肉というのは、鶉(うずら)のことでした。鶉は、秋に、今のイスラエルとその周辺から、アラビア半島を経て、アフリカ中央部にまで渡っていきます。春になると、アフリカからイスラエルの辺りに戻ってきます。その途中で、たくさんの鶉が、なんと地面で捕獲できるほどにまでたくさんやって来ます。古代エジプトの記録でも、人が罾をもって、地面のところで捕獲している絵画が残っているそうです。そして朝には、露が降りますが、霜のように細かいものがありました。

15 イスラエルの子らはこれを見て、「これは何だろう」と言い合った。それが何なのかを知らなかったからであった。モーセは彼らに言った。「これは【主】があなたがたに食物として下さったパンだ。16 【主】が命じられたことはこうだ。『自分の食べる分に応じて、一人当たり一オメルずつ、それを集めよ。自分の天幕にいる人数に応じて、それを取れ。』」

「これは何だろう」という言葉から、これがマナと呼ばれます。天から降りてきたものですが、主が与えると約束して、それで与えられた主の食物です。そこから、主は、日々の糧を食べるようにして、主の口から出る言葉をもって生きなさいということ、申命記で語られます。「8:3 それは、人はパンだけで生きるのではなく、人は主の御口から出るすべてのことばで生きるということ、あなたに分からせるためであった。」

そして大事な指示があります、「自分の食べる分に応じて、一人当たり一オメルずつ、それを集めよ。」とのこと。主は、日毎にその食べられるだけの分量を与えられるということです。一オメルは 2.3 リットルですが、それだけを与えられるのであり、必要以上のものを与えられません。しばしば言われることですが、「神は必要を満たされるが、欲望は満たされない。」

2C 民の欲望 17-21

17 そこで、イスラエルの子らはそのとおりにした。ある者はたくさん、ある者は少しだけ集めた。18 彼らが、何オメルあるかを量てみると、たくさん集めた人にも余ることはなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった。自分が食べる分に応じて集めたのである。

目分量で集めていたので、ある人たちが一オメルではなく、それ以上のものを集めました。また、少なく集めていた人たちもいました。あるいは意図的に、欲を出して、一オメルよりも多く集めてい

た者たちもいたかもしれません。そのために、事欠く人たちが出てくるのです。こうやって、不平等が生じたのです。一部の欲深い人たちによって、他の人たちが貧しくなってしまうのです。

ところが、なんとこのマナは、結局一オメルになるように増えたり、減ったりするようです。マナが物理的な食べ物だけとは限らないことが分かるでしょう。それゆえ「御使いのパン(詩篇 78:25)」とも呼ばれますが、霊的な食物であることがお分かりになるでしょうか？これは、主が平等にしてくださいという原則を表しています。パウロが裕福なコリントの人たちに、献金についてこう話しました。「Ⅱコリ 8:14-15 今あなたがたのゆとりが彼らの不足を補うことは、いずれ彼らのゆとりがあなたがたの不足を補うことになり、そのようにして平等になるのです。「たくさん集めた人にも余ることではなく、少しだけ集めた人にも足りないことはなかった」と書いてあるとおりです。」

19 モーセは彼らに言った。「だれも、それを朝まで残しておいてはならない。」20 しかし、彼らはモーセの言うことを聞かず、ある者は朝までその一部を残しておいた。すると、それに虫がわき、臭くなった。モーセは彼らに向かって怒った。21 彼らは朝ごとに、各自が食べる分量を集め、日が高くなると、それは溶けた。

先に話しましたように、主に拠り頼むために、日毎の糧のみを主は与えられました。しかし、それを蓄えるというのは、主の慈しみではなく、自分自身に拠り頼むことの表れであって、不信仰なのだということです。しかも、朝ごとというのが大事ですね。主の下さる新しい一日の始まりに、主の慈しみを味わうのです。エレミヤが、哀歌で話した通りです。「3:21-23 私は待ち望む。【主】の恵みを。」実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみが尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は偉大です。」

2B 主の安息 22-30

1C 加えられる必要 22-26

22 六日目に、彼らは二倍のパンを、一人当たり二オメルずつを集めた。会衆の上に立つ者たちがみなモーセのところに来て、告げると、23 モーセは彼らに言った。「【主】の語られたことはこうだ。『明日は全き休みの日、【主】の聖なる安息である。焼きたいものは焼き、煮たいものは煮よ。残ったものはすべて取っておき、朝まで保存せよ。』」24 モーセの命じたとおりに、彼らはそれを朝まで取っておいた。しかし、それは臭くもならず、そこにうじ虫もわかかなかった。25 モーセは言った。「今日は、それを食べなさい。今日は【主】の安息だから。今日は、それを野で見つけることはできない。26 六日の間、それを集めなさい。しかし七日目の安息には、それはそこにはない。」

主は、日毎に備えてくださるマナについて、第七日目の休みの日については、しっかりと二日分、備えてくださることを、かなり強く強調しておられます。日毎の糧というのは、主が備えてくださいますが、けれども、そこには彼らが集めるという労働が含まれます。私たちも、日毎、主が備えてくだ

さるという真実を見るのですが、そこには同じように労働が含まれます。自分たちが仕事で得た糧を食べるのです。けれども、その労働をさえ、第七日目は一旦、止めなければいけません。それは、23 節に書いてあるように、「【主】の聖なる安息」だからです。聖なる安息とは、他の日とは別たれている、主に属する日ということです。そこで自分たちの働きをやめて、主ご自身を覚えることです。

私たち、教会の時代に生きるものは、安息日をイスラエルのように守るように命じられていませんが、それでも、週の初めの日に集まることが新約聖書の中に書かれています。どの日も主の日にする人もいれば、そうでない人もいるのですが、いずれにしても日を聖別して、主を覚えることは必要です。ですから、集まって礼拝を捧げるのであり、その日を守るために、主は必要を余計に満たしてくださるということです。モーセは、いつもと違う動きをするので、注意深く、強調して話していますね、残ったものはすべて置いて、朝まで保存しなさいと話しています。果たして、その残したものは、臭くもならず、蛆虫もわきませんでした。私たちも、礼拝に臨むというのは、いつもと異なる動きを意識的にするのです。毎日の延長線上に礼拝があるのではなく、その毎日を一旦、止めるのだということで、備えを前もって行うのです。

2C 命令を拒む者たち 27-30

27 七日目になって、民の中のある者たちが集めに出て行った。しかし、何も見つからなかった。28 【主】はモーセに言われた。「あなたがたは、いつまでわたしの命令とおしえを拒み、守らないのか。29 心せよ。【主】があなたがたに安息を与えたのだ。そのため、六日目には二日分のパンをあなたがたに与えている。七日目には、それぞれ自分のところにとどまれ。だれも自分のところから出てはならない。」30 それで民は七日目に休んだ。

先と同じように、命じられても守らない者たちがいました。モーセは戒めています、そして、「【主】があなたがたに安息を与えたのだ。」と言っています。これは、自分たちが休むことではなく、主の与えられた安息なのです。ですから、これは重荷ではなく、むしろ恵みなのです。

そして、安息を楽しむことができるように、備えも与えておられます。イエス様が付け加えて備えてくださる約束を下さいましたね、「マタ 6:31-33 ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って、心配しなくてよいのです。これらのものはすべて、異邦人が切に求めているものです。あなたがたにこれらのものすべてが必要であることは、あなたがたの天の父が知っておられます。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」

3A 荒野における主の真実 31-36

31 イスラエルの家は、それをマナと名づけた。それはコエンドロの種のように、白く、その味は蜜を入れた薄焼きパンのようであった。

マナの説明が書かれています。一つは白いものだということです。もう一つは、少し蜜を入れた薄焼きパンのようなものだということです。白いということは、聖書の中では霊的な意義があります。「清い」ということです。衣について、白い衣と言えば、それは清さを表し、正しい行いを表しています。そして甘いのは、主の慈しみ深さを表しています。みことばを甘いものとして、詩篇の著者が表現していますね。「19:10 それらは金よりも多くの純金よりも慕わしく蜜よりも蜜蜂の巣の滴りよりも甘い。」

32 モーセは言った。「【主】が命じられたことはこうだ。『それを一オメル分、あなたがたの子孫のために保存しなさい。わたしがあなたがたをエジプトの地から導き出したときに、荒野であなたがたに食べさせたパンを、彼らが見ることができるようにするためである。』」33 モーセはアロンに言った。「壺の一つ持って来て、マナを一オメル分その中に入れ、それを【主】の前に置いて、あなたがたの子孫のために保存しなさい。」34 【主】がモーセに命じられたとおり、アロンはそれを保存するために、さとしの板の前に置いた。

ここの箇所は、後に守ることになります。というのは、さとしの板とは十戒の板のことで、それと共に契約の箱に入れるのは、シナイ山の前で幕屋を造る時に行うことだからです。壺は、ここで用意して、マナを保存したのかもしれませんが、それをさとしの板の前に置くのは後のことです。

これまでの祭り、すなわち過越の祭りや種無しパンの祝いの時と同じように、主はこれをずっと覚えているようにと、残すように命じられています。これに至ってはとてつもない期間、溶けることなく保存されているのです。これは、確かに物理的な食物のみならず、神の食物であり、天からの食物、霊的な食物であります。主は、みことばと共に、このようにして人々を生かし続けたのだということを、証ししたいと願われました。それで記念とされたのです。

35 イスラエルの子らは、人が住んでいる土地に来るまで、四十年の間マナを食べた。彼らはカナン地の境に来るまでマナを食べた。36 一オメルは一エパの十分の一である。

マナは四十年の間、ずっと与えられていました。それが終わる時が、正確にヨシュア記に記されています。「ヨシ 5:10-12 イスラエルの子らはギルガルに宿営し、その月の十四日の夕方、エリコの草原で過越のいけにえを献げた。過越のいけにえを献げた翌日、彼らはその地の産物、種なしパンと炒り麦を、その日のうちに食べた。マナは、彼らがその地の産物を食べた翌日からやみ、イスラエルの子らがマナを得ることはもうなかった。その年、彼らはカナンの地で収穫した物を食べた。」主は、ここまで真実に彼らに日毎の糧を備えてくださったのです！主は私たちが事欠くことがないようにしてくださいます。私たちにとって与えられている約束の地は神の国ですが、そこに入るまでの間、主は必ず私たちに備えをしておられます。御国を来たらせたまえ、と祈った後に、日用の糧を今日も与え給え、というのは、確かにかなえられる祈りなのです。

この話は、新約聖書の中で、イエス様が悪魔から誘惑を受けられた時、申命記 8 章の言葉を引用することによって出て来ますが、最も大きく出てくるのは、ヨハネ 6 章です。五千人の給食の奇蹟の後に、群衆がイエス様に付いてきました。イエス様は、「6:27 なくなってしまう食べ物のためではなく、いつまでもなくなる、永遠のいのちに至る食べ物のために働きなさい。」と言われました。そして、「神が遣わした者をあなたが信じること、それが神のわざです。」と言われました。つまり、イエスを信じることこそが、永遠のいのちに至る食べ物を食べることなのだとされたのです。群衆は、「6:30 どんなしるしを行われるのですか。何をしてくださいますか。」と言って、「私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『神は彼らに、食べ物として天からのマナを与えられた』と書いてあるとおりです。」と挑戦したのです。今さっき、五千人の給食で大きな徴を見たのも関わらずであります。彼らの問題は、徴を見ていないということではなく、主を求めている、食べるという、肉体的なことしか求めていなかったことです！

そこでイエス様が言われました、「6:35 わたしがいのちのパンです。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」イエス様は、サマリアの女に対しても、ニコデモに対しても、誰に対しても、永遠の命、霊的な命を語られ、そしてわたしこそが、その永遠の命であること言われました。私たちが、日々の生活の中で、ゆえにリアルに、現実的に、日々の糧が与えられると同じように、この方が自分のマナ、イエス抜きには生きられないということを、知っているかどうか？であります。